見本

令　和　3　年　度

医　学　部　看　護　学　科

特　別　選　抜

小　　論　　文

注　意　事　項

1．試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開かないでください。

2．この問題冊子には，表紙を除いて問題用紙は３枚，解答用紙は２枚，下書用紙は２枚あります。試験開始の合図があってから確認してください。
　なお，文字等の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等があった場合は，手を挙げて監督者に申し出てください。

3．試験開始後に，解答用紙の指定欄に受験番号を記入してください。

4．解答はすべて解答用紙の所定の欄に横書きで記入してください。解答用紙の所定の欄以外に記入した解答は，評価（採点）の対象としません。

5．問題冊子および下書用紙は，試験終了後，持ち帰ってください。

実施年月日
2.12.14
富山大学

見本

1 以下は，Aさんが，30歳以上の人を対象に歩数と血圧の分析を行い，その結果について述べたものである。この内容を読み，設問に答えなさい。

対象者全員となる6,800人（男性3,400人，女性3,400人）における1日の平均歩数は6,601歩であった。年齢別にみると，30歳代と40歳代の平均歩数が約7,500歩，50歳代になると約6,900歩，60歳代では約6,000歩に減少。70歳代以上では約3,700歩と徐々に減少していることが分かった。次に，1日あたりの平均歩数と収縮期血圧について分析したところ，以下の図に示すように男女ともに歩数が増加すると，収縮期血圧が下がる傾向が認められた。

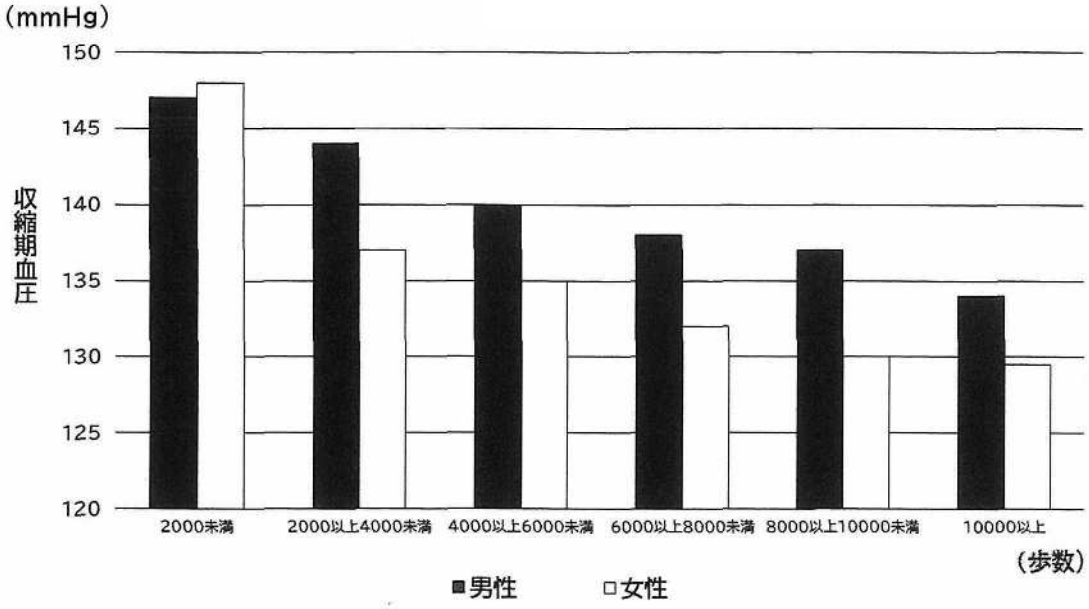


図 1日の平均歩数と収縮期血圧の関係

注）血圧が上がる原因には，塩分の取り過ぎ，肥満，運動不足，加齢，喫煙などがある。

注）歩数は，調査期間に各個人に万歩計をつけてもらい計測した。歩数の測定方法と血圧の測定方法，対象者人数の設定には，問題は生じていないものとする。

設問 Aさんは「歩けば歩くほど，血圧が低下する」と考えた。この考えが正しいかどうかを判断し，その理由を300字以内で述べなさい。

ただし，解答には，以下【　】内の4つの用語を用いることとする。

【年代，　集団，　要因，　影響】

参考書籍：上田尚一著：統計の誤用・活用（朝倉書店），p.52，2006（一部改変）

見本

2 次の文章を読んで，死に関わる具体的な問題について，なぜ当事者の視点を考慮して議論することが大切なのか，400字以内で述べなさい。

死を人称の立場で捉えたのは，フランスの哲学者であるJankélévitchである。日本ではジャーナリストの柳田邦男氏が死に関わる具体的問題についてこの立場を展開し，死生学領域では馴染みの深いものになっている。

ここでいう人称とは，一人称，二人称，三人称という語りや主体の立場である。つまり，物事を議論するとき，「私」の問題として判断するか，「あなた」という関係性をもつ人の立場で判断するか，あるいは第三者としての一般的立場で判断するかによって，議論の軸足が変化する——どの立場で議論するかによって，死の捉え方が異なる——ということである。簡単に説明すると次のようになる。

三人称の死は，語る人自身と個人的な関係をもたない人の死である。たとえば，テレビやニュースで見るような交通事故の犠牲者であったり，どこかの病院で亡くなる知らない人の死である。このような三人称の死について，ニュースを聞いて涙を流したり，胸が締めつけられるような思いをすることはない（もちろん同様の経験をした人が，その出来事を自分のことのように受け止めることはあるだろう。しかし自分のことのように受け止めるという時点で，既にこの立場は三人称の死の見方ではなくなっている）。つまり，客観的な出来事としての死なのである。Jankélévitch（1966）もまた，三人称の死は，概念的に把握された死であるとしている。

しかし二人称の死はそうではない。二人称とは，語る人自身が「あなた」と呼ぶことのできる対象を指す。したがって二人称の死は，私にとっての「大切な人の死」ということになる。自分自身と関係性をもつ人の死は決して客観的な出来事ではなく，悲しみや苦しみを伴う主観的，感情的な出来事になる。二人称の死の見方は，三人称でいう客観的な死とは，根本的にその立場も感じ方も異なっているといえる。

そして一人称の死は，いうまでもなく語る人（私）自身の死である。自分自身の死は，大切な人たちとの別れという意味では二人称と同様であり，主観的であり，さまざまな感情を伴う出来事であるといえる。しかし二人称の死との違いは，二人称の死が，愛する人との別れの後もなお生きる自分自身が在るのに対し，一人称の死は自らの存在が死すことであるため，自分自身の人生（生きてきたことや死ぬこと）に対する主観的意味づけや，死後どこへ行くのかといった死を直視した問題に向き合う点である。

死について語るとき，私たちがとる立場は三人称であることが多い。つまり，死とは何か，死ぬとはどういうことかについて語る場合，それを自分自身の死（一人称の死）や私にとって大切な人の死（二人称の死）と捉えることは少なく，むしろより一般化された三人称の死として客観的に語る傾向がある。新聞やニュースで語られる生と死もまた，この立場である。さらに生命倫理の問題は，通常客観的に議論され，一，二人称で語ることは少ない。

死を自分自身のもの，あるいは大切な人のものとして考えることは，日常生活の中でそれほど多くないのが現代社会の在り様である。現代社会では死を迎える場所はその8割近くが病院であり，自宅での看取りは行われず，ましてや自分の死について考えることはほとんどない。生まれる子どももまた病院が人生のスタートの場であり，その生まれ方も医療の関わりが大きくなっている。リアルないのち観が根付かず，バーチャルないのち観が蔓延（まんえん）する現代社会は，三人称の立場でいのちを捉えることを得意としてきた。

見本

しかしながら，三人称の立場のみでいのちを議論することには大きな落とし穴がある。それは，当事者の視点を考慮しない議論の不十分さや危険性である。

柳田邦男氏は，脳死議論が始まった当初，脳死者からの臓器移植に賛成する立場をとっていた。彼は脳死についてその著書『犠牲　サクリファイス――わが息子・脳死の 11 日』で次のように述べている。

> これからの時代は，……脳死をもって人の死とする考え方に切り換えていかねばならないだろうと考えていた。というのは，私は物事を判断するときに，科学的な合理性というものを大事にすることを，信条にしてきたからだった。(pp. 212-213)

ところが柳田氏は，こころを病んでいた次男洋二郎氏が自殺未遂し，その後 11 日間の脳死状態を経て死亡するという経験を通して，次のようにその考えを改めている。

> 毎日，私が会いに行き，「おい，洋二郎」と声をかけると，血圧も心拍数も上昇する。看護婦が「あら，上がった」と驚く。……顔も胸も血色がよく，あたたかい湿り気がある。この身体にメスを入れて，心臓を取り出すことなど，私にはとてもできないと思ったとたんに，脳死をわかったつもりでいたそれまでの私の考えがぐらついてしまったのだ。(p. 214)

これは，今まで三人称の立場から脳死を語っていた柳田氏が，自身の息子の脳死を体験し，当事者（二人称）として脳死を語るとき，もはや三人称の立場で語れないことを示したものである。

出典：藤井美和著：死生学と QOL，関西学院大学出版会，39-42，2015．より引用，一部改変

令和３年度　医学部看護学科　特別選抜
解　　答　　用　　紙

見本

科　目	小　論　文

受　験　番　号

1　解　答　欄

5　10　15　20

5

10

15

(300字)

(20×15)

採　点

令和３年度　医学部看護学科　特別選抜
解　　答　　用　　紙

（２の２）

見本

科　目	小　論　文

受　験　番　号

2　解　答　欄

5　10　15　20

5
10
15
20
(400字)

(20×20)

採　点

下書用紙

注意：　この下書用紙に記入した解答は，採点の対象としませんので持ち帰ってください。

見本

1　解　答　欄

5　10　15　20

5

10

15

(300字)

(20×15)

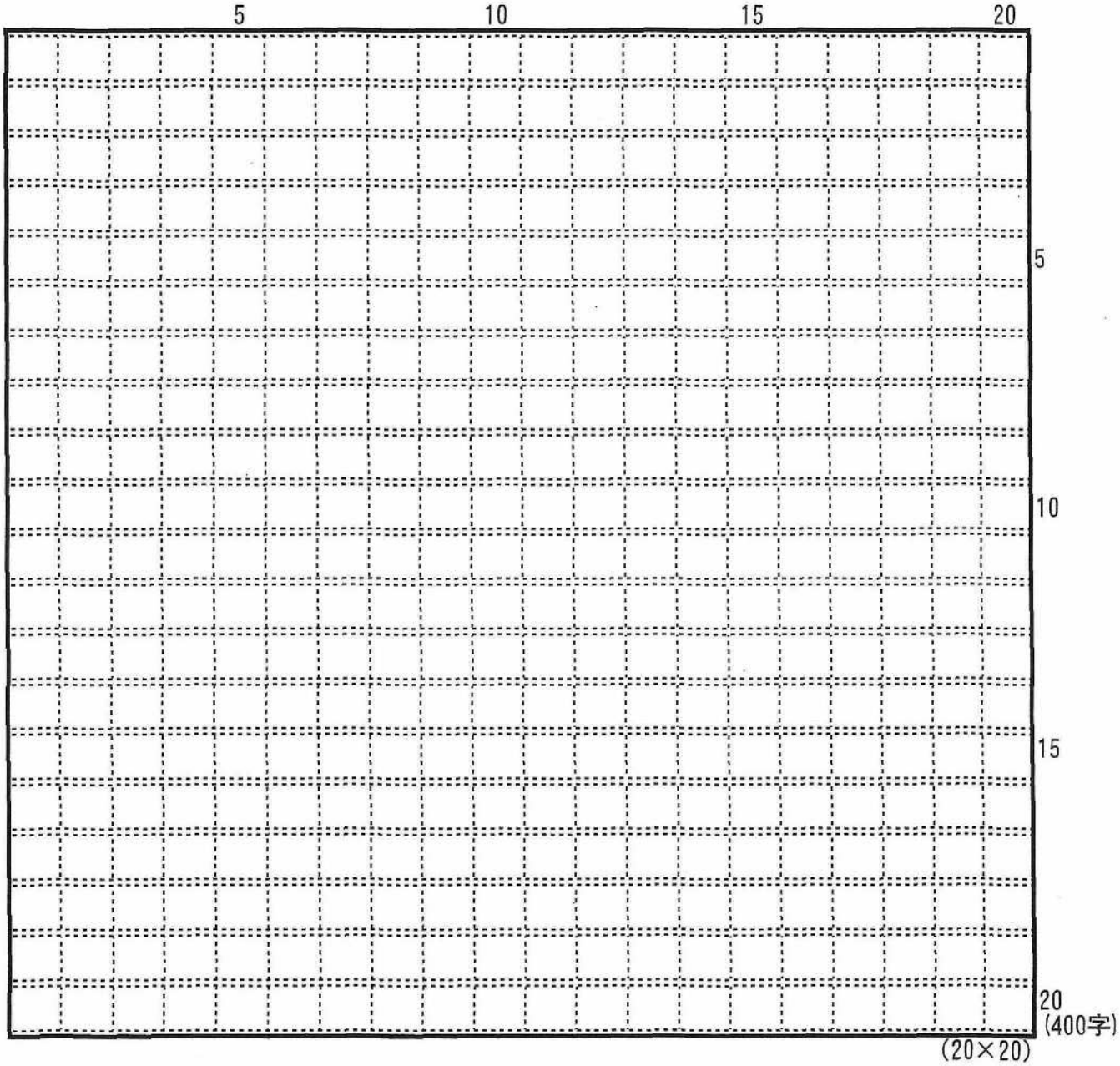
下　書　用　紙

下書用紙

注意：　この下書用紙に記入した解答は，採点の対象としませんので持ち帰ってください。

見本

2　解　答　欄



下　書　用　紙